

# 社会情勢による海外留学中断が大学生のキャリア設計に与える影響

## The Interruption of Study Abroad Programs Due to Social Unrest and Its Impact on Affected Students' Career Prospects

名古屋大学 国際教育交流センター

巽 洋子・岩城 奈巳

### 要 旨

社会情勢により海外留学中断を余儀なくされた大学生6名にインタビューを実施し、その結果をケーススタディとして報告する。本稿では、学生がどのように留学中断を受け止め、帰国後キャリア設計を再構築したのかを考察した。

まず、留学中断という事態の捉え方次第でキャリア設計に与える影響が異なることが分かった。留学中断を前向きに捉えず意識を切り替えた学生は、新たなチャンスを自ら創出しプラスの影響を得ていた。一方で、切り替えができないまま周囲に流され就職活動を開始した学生にはマイナスの影響が見られた。次に、学生は留学中断経験からも変化への対応力などの学びを得て、キャリア設計を再構築する力を持っていることが明らかとなった。

最後に、留学中断とキャリア設計再構築の過程では、大学内組織が連携して学生を支援する体制が重要な役割を担っており、情報共有、帰国判断の相談対応、先の見通しを示すことが求められていると判明した。

### キーワード

留学中断 カリヤ設計 交換留学 学生支援

### 目 次

1. はじめに
2. 調査概要
3. インタビュー記録
4. 考察：留学中断がキャリア設計に与えた影響
5. 大学による支援と課題

### 1. はじめに

本稿では、留学中断が学生に与える影響を把握し、大学として今後の学生サポートとケアに生かすことを目的として、社会情勢により交換留学が中断となってしまった大学生6名にインタビュー調査を実施した。その結果から留学中断が大学生のキャリア設計に与えた影響を考察し、留学を希望する学生への支援を実施する上での今後の課題を報告する。

筆者らは、名古屋大学国際教育交流センター海外留学室にて、学生の海外派遣業務を担っている。先行研究として本学学生211名にアンケート調査を実施しCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）による留学に対する意識変化を考察した際、COVID-19収束後に留学を希望している学生が65.4%おり、学生の留学へのモチベーションはコロナ禍においても堅持されていることが明らかとなっている（岩城・巽, 2021）。一方で、COVID-19感染拡大により海外渡航の先行きが不透明となった今年度、留学相談に来室する学生からは「いま留学を計画しても無駄になる可能性を考えてしまい留学準備を始められない」、「就職活動の時期が自分の計画からずれることに抵抗があり、留学したい気持ちはあるが悩んでいる」という相談も寄せられている。留学を中断した学生へのインタビュー記録は、COVID-19収束後に留学予定の学生や、コロナ禍のいま留学を検討している学生にとっても参考になると考え、後輩へのアドバイスも含めた質問項目を設定して調査およびケーススタディを実施した。

社会情勢による留学中断は学生個々にとっては予期せぬ出来事であったに違いないが、大学においては重症急性呼吸器症候群（SARS）、豚インフルエンザ、中東呼吸器症候群（MERS）等、過去にも対応してきた例がある。2003年3月にWHOからSARSグローバル

アラートが出された際、名古屋大学では「SARS 緊急対策委員会」を設立し、SARS 伝播確認地域からの研究者・留学生の受入れに備えて組織横断的な体制を構築した(野水, 2004)。しかし留学中断学生への支援は担当教職員の経験則に基づいた対応が一般的で、本稿で扱う2019年の香港民主化デモ、2020年のCOVID-19による学生の留学中断および帰国を支援した際には、本学内に緊急対策組織が立ち上がることはなかった。今回の調査記録を今後の国際教育交流業務に生かしたいと考え、本稿の最後では名古屋大学の対応についても省察し報告する。

## 2. 調査概要

### (1) 調査方法

オンライン上で、Zoom Video Communications 社の提供する遠隔コミュニケーションツール「Zoom」を使用し、インタビュアー2名(本稿筆者: 巽洋子・岩城奈巳)、インタビュー学生1名の計3名で、映像 ON の状態でインタビューを実施した。チャットボックス等のツールは使用せず、事前に学生に渡した質問紙の質問13項目に沿って自由に話してもらった形式とした。また記録を補う道具として、繰り返し視聴でき、第三者に解釈を尋ね中立性を保証することの可能な Zoom 録画機能を使用した。2020年12月15日~2021年1月12日の期間に調査を実施し、概ね30分間のインタビューとなった。

### (2) 質問項目

#### 基本情報

- ① 氏名, 所属, 学年, 渡航国, 渡航先協定校, 渡航期間 (当初予定および実際)
- ② 留学の目的, キャリア展望 (当初の希望)

#### 留学中断による言動, 意識変化

- ③ 「留学中断」が決まった時の心理状況
- ④ 「留学中断」決定から帰国までの間に取った行動
- ⑤ 帰国後から数カ月を取った行動
- ⑥ 「留学中断」に納得できたのはいつ頃か

#### 留学を振りかえって

- ⑦ 留学の満足度は、大変満足:100, かなり心残り:0 とすると何%か
- ⑧ 留学を通して成長したと感じられることは何か
- ⑨ 留学中断が自身のキャリア設計に与えた影響の大きさは、どれくらいか  
(大変大きい:100 ←→ 影響はない:0 とする)
- ⑩ 今後のキャリア展望
- ⑪ 留学中断という体験を通して成長したと感じられることがあるか

#### 参考意見

- ⑫ 後輩への助言 ※海外渡航できない、急遽留学中断帰国となる、といった状況が今後も起こりうるが、大学生活の一部として海外留学を計画することを後輩に勧めるか
- ⑬ 名古屋大学の対応について、感謝や要望など

### (3) インタビュー対象

名古屋大学の全学間交換留学制度にて、2019年度の秋学期から1年間の予定で本学の海外協定大学での留学を開始し、本人の意思ではなく社会情勢により留学を中断して帰国することとなった学生を対象とした。該当学生のうち、渡航国・留学先の協定大学が重ならないよう調査協力者を募集し承諾を得た6名にインタビューを依頼した。本稿ではインタビュー協力者6名を匿名(学生A~学生F)で記し、各学生の情報は〔表1〕の通りである。なお6名全員の留学出発時期は2019年8月で、協定大学の学期終了後(2020年5~

〔表1〕インタビュー学生情報

学生	所属	留学年次	留学先	帰国事由	実際の帰国日
A	経済学部	3年生	インドネシア	COVID-19	2020年3月25日
B	法学部	3年生	香港	民主化デモ	2019年11月19日
C	文学部	3年生	デンマーク	COVID-19	2020年3月28日
D	法学部	2年生	スウェーデン	COVID-19	2020年3月23日
E	工学部	3年生	アメリカ	COVID-19	2020年3月22日
F	文学部	4年生	フランス	COVID-19	2020年3月24日

7月)帰国を予定していた。

### 3. インタビュー記録

学生 A～F から得られた回答を学生の意図・内容が変わらないように注意して簡潔にまとめたインタビュー記録から、本稿でケーススタディとして扱う部分を抜粋して以下に記す。なお、前述の質問項目の番号①、②、…と対応するかたちで、以下インタビューデータに回答項目の番号①、②、…を付す。また、本稿 4. 考察：留学中断がキャリア設計に与えた影響で着目している箇所には下線を、5. 大学による支援と課題の参考箇所には点線を付している。

#### 学生 A

- ② 帰国後に就職活動を始める予定で留学を開始した。
- ③ 授業もオンラインになり現地の学生も地元に戻ったため、どこも行けず周りに友人もない状態で滞在する意味はあるのか、早く帰国して就職活動を開始した方がいいのでは、とも思った。帰国することを自分で決断することは何かから逃げているような気がして心苦しかった。大学から帰国するよう言われて納得して帰国できた。帰国指示から帰国までは1週間。
- ④ 帰国便の手配、現地授業について現地オフィスの人と話し合い、帰国を決めた時点から就職イベントへの予約を開始した。帰国が決まるまでの期間の方が心理的に大変だった。
- ⑤ 本来は7月まで授業の予定だったがオンラインになった関係で5月中旬までとなくなってしまった。協定大学の授業を履修しながらの就職活動は苦しかった。
- ⑨ キャリアへの影響：20% 大学院進学は就職活動で感じたことをもとに決めたので、留学中断による直接的な影響ではないが、当初予定していた進路にはならなかった。就職活動とオンラインでの留学先授業履修の同時進行で、意識を切り替えられなかった部分もある。
- ⑩ 就職活動を甘くみていた部分もあったと思う。当初の予定時期より早いタイミングで焦って応募を開始し、知識がないまま臨んでしまった。協定大学のオンライン授業履修と並行しての就職活動は厳しかった。進路は結局、他大学への大学院進学となった。留学中からもっと勉強したいと思うようになり、COVID-19流行前の1月から既に、ゼミの指導教官には大学院進

学の相談もしていた。8月まで就職活動をしたが上手くいかず、自分に合う企業も見付けられなかった。大学院修了後には、JICA や企業での経済分析か、研究者などの職を考えている。

⑪ 留学中断という経験から成長したと感じたことは特にない。

#### 学生 B

- ② 将来は、政治の世界に挑戦したい。その前段階として日系の民間企業への就職を考えていた。日本で政治の世界で働く(議員、官僚、秘書)ためには、経済を回す主体は会社だと思うので、一度は日系企業に就職して知識や経験を得たいと考えていた。
- ④ 航空券確保、空港への限られたアクセス方法が稼働するののかという確認(便の前夜に空港入り)、家族への報告を行い、留学先の友達と食事に行った。また、海外留学室の教員に、就職活動への悪影響が及ばないように内定先から問合せがあった際に事情説明をしてもらえるよう協力を依頼し、帰国後すぐに2019年秋学期(10月開講)のゼミと授業履修を特別に許可してもらう交渉をお願いした。留学中断が決定してから帰国までの期間は1週間。
- ⑤ 帰国後も協定大学でのオンライン授業履修を継続し、名大の授業・ゼミにも参加。留学中に上海とボストンでのキャリアフォーラムに参加して数社から内定は獲得していたが、帰国後も別の企業のインターンシップに申込み参加した。香港の情勢が変わりやすいというのは留学前から念頭にあったので、留学中断は仕方がないと割り切って前向きに考えていた。
- ⑨ キャリアへの影響：30% 少ない方だと思う。当初のキャリア展望であった政治の世界にチャレンジする前段階として、民間企業に就職するという目標は達成された。影響があったのは、就職先が日系企業から外資系になったことくらい。
- ⑩ 当初は6月まで留学して帰国後の夏選考で日系企業に考えていたが、時期が早まった分、選択肢が与えられて何社か訪問した結果、資本に拘ることに意味はない、日系・外資関わらずやりたいことを出来るようなところで働きたいと思うようになった。帰国して改めて日本の企業の情報を調べて比較し、外資の方が風通しも良く、スピード感もあって面白そうだと感じた。大学卒業後は外資企業に就職し、日本国内で勤務する予定。その後に政治の世界に入りたいというキャ

リア設計は変わっていない。

⑪ 留学中断による経験というより日本に早く復帰したことで、キャリアパスや、新たな様々な活動（政治を深く知る活動、ウズベキスタンとの交流等）にチャレンジできた。

⑬ 名古屋大学にはすぐ対応してもらい、家族にも電話してもらってありがたいと感じた。外務省の海外渡航危険レベルが民主化デモでは上がらなかったため強制帰国にはならず、あくまで自主的に（大学から勧められて）帰国という形だったので補助金等がなかったことは不満ではある。2020年秋に内定していた欧州への交換留学は、COVID-19影響で大学の方針での派遣中止が決まってしまい、大学は「安全」と「経験」のバランスを考えているのかなという感想を抱いた。

#### 学生 C

② 将来の展望は、在学5年で学部を卒業して海外大学院への学位留学か、国内大学院に進学した後にもう一度、海外大学院を受験しようと考えていた。

⑤ 帰国後からしばらく、協定大学の授業をオンラインで履修したが、時差もありしっかりと受講できなかった。当初は5年で卒業しようと計画していたが、指導教員から学部で足踏みしても学べることは変わらないと助言をもらい、4年で卒業して、大きな準備を必要としない学内（名古屋大学大学院）進学を選択することに決めた。

⑧ 成長したと感じるのは、プランBの大切さを知ったこと。自分は頑固な性格で決めた通りにいかないのは嫌であったが、COVID-19での留学中断がきっかけで、別のプランを予め考えておいて、切り替えることが大事だと考えるようになった。

⑨ キャリアへの影響：30% もともと大学院進学を考えていたので、就職活動の人ほどは影響がなかったが、他大学の大学院という選択ができなくなり選択肢が狭まってしまった（COVID-19で研究室訪問ができなかったため）。ただ、内部進学の方が今後留学する時に融通も利きそうなので、これで良かったと思っている。

⑩ 名古屋大学大学院に進学。大学院生として再度の交換留学出願（2022年度航）を検討中。

⑪ 留学中断が決まった時は立ち直れないと思ってグズグズしていた。留学中断と同時にJASSO奨学金も打ち切りになると言われ、帰国せざるを得ない状況に

なった際に、学生同士でグループを作り、署名をしてJASSOに直接訴えた。その結果、緊急帰国の費用も一部負担してもらえることになった。民主主義の大切さを知り、その力があることを学んだ。

⑬ COVID-19はイレギュラーだったので大学側の戸惑いも分かる。しかし、レベル1の時に「帰国するかどうか保護者と相談して決めてください」という文言で、レベル2の時に「皆、帰国してください」という文言だったが、レベル1から2になるのがあつという間だったので、レベル1段階で、もっと強い言葉で帰国を勧めて欲しかった。今となってはレベル1の時に帰国すべきだったと分かるが、その時はレベル2になってからで大丈夫だと思っていた。

#### 学生 D

② Peace and Conflict や難民問題について学び、自分が今後もそこに係わりたいかどうかを見極めることが留学の目的だった。卒業後は就職を予定していたので、キャリア計画に大きな変化はなかった。難民問題に関わりたいという気持ちは、留学を通じて薄れた。

⑤ 帰国後は協定大学の授業を履修し続けた（5月上旬まで）。春休みの期間は授業と同時並行で就職活動も始まったので、そこに追われつつもあった。4月から名古屋大学に復学し、協定大学と名古屋大学の授業を同時並行で頑張った。協定大学との手続きは問題なかったが、航空券の払い戻しの手続きが大変だった（金銭的には民間奨学金に補償してもらえたため負担はなかった）。

⑨ キャリアへの影響：10～20% 留学中断の影響は殆ど無い。むしろ進路にはCOVID-19が与えた影響が大きい。

⑩ 留学前には国連職員になりたいという夢があったが、国連のCOVID-19パンデミック対応に失望し、職員になりたいという気持ちが薄れた。世界をまとめる役割である組織（国連）の意味とは？と疑問にも思った。難民問題に興味もっていたが、留学中のプロジェクトを通じて一定の満足感を得られたので仕事にしたいというモチベーションはなくなった。将来的に継続的に難民問題に関わっていきたいという思いはあるが、ポジティブな選択として、一旦、別の道を目指そうと思った。COVID-19の影響で雇用が減り就職活動に響く社会情勢を見て、自分も安定志向に傾いたと思う。現在の第一志望は、大学一年時に学生団体に広

報委員として活動した体験を仕事にしたいと考えて、広告代理店への就職を望んでいる。

⑫ そもそも留学はプラン通りにはいかない。ハプニングを楽しめる心の余裕、留学でやりたいことを目指して頑張る過程が重要だと思う。留学には成長できる場が絶対待っているの、行くことは何があっても勧める。自分自身は留学に行く前にはそう思っていなかったの、留学を通じて変わった部分だと思う。

⑬ 海外留学室から協定大学に帰国について先んじて連絡してもらえたため、協定大学のオフィスと意思疎通がすぐできて有り難かった。分からないことがあったら何でも聞いて下さいという海外留学室のスタンスも良く、状況を随時共有してもらえて良かった。

#### 学生 E

② 留学目的は3つあり、協定大学で学びたい学問(国際貿易や起業マインドと、航空宇宙分野)があったこと、多文化に触れて価値観を広げたかったこと、卒業後にどこの大学院へ進むのが良いかの調査・選定をすることであった。留学中にアメリカ国内(東海岸・西海岸)の大学を訪問し、日米の大学院それぞれの良いところが分かった。交換留学の後期には興味のある研究室にアポイントメントを取り、研究について話し始めたところで帰国となったため、やり切ったかという思いもあった。キャリアの展望としては、国内の大学院進学(内部進学もしくは国内他大学)に絞って考えている。大学院入学後に再度の留学も視野に入れている。

③ 留学中断が決まったのは3月10日頃。協定大学でやりたいことは出来ていたの、留学中断ではあったが結構長い間滞在できて良かったと満足度は高かった。心残りだったのはアメリカの研究室にトライし始めた段階で何も出来なかったこと。周りの友人との別れは突然すぎて悲しかった。

⑤ 4月に名古屋大学の授業が始まり、5月までは協定大学のオンライン授業も履修していた。授業と同時に就職活動をする代わりに、早く研究生生活を始めたいと願い、先生に交渉して一年早く研究室に入れてもらえるようにした。当初の計画では4年生1年間の研究室所属の予定が、4年生・5年生と2年間研究室に入るようになった。協定大学寮の返金手続き、携帯や保険の解約もした。その後、協定大学授業の学びを生かして6ヶ月間のインターンに参加中(大学院修了後に

起業するか就職するかのキャリア選択に向けて、ベンチャー企業で海外事業展開などビジネス面を学んでいる)。

⑥ 3月上旬にはこのまま滞在は無理だろうと覚悟を決めていて、留学中断の納得はすぐにできた。現地の友達と別れることは寂しかったが納得して帰国した。

⑨ キャリアへの影響：50%

⑩ 来年の夏に国内大学院をいくつか受験予定。アメリカの研究室を訪問したことで、日本の専門科目(材料分野)の研究力の強さに気づいた。材料を国内で研究し、部品・デバイス・モジュール等の展開先は留学で身に付けることで、ものづくりの流れを網羅し就職に備えたい。そのためにまずは国内で大学院進学。今回の交換留学は授業メインで、研究のことが進められなかったのが多少心残りなので、大学院時には研究メインで留学したい。海外大学院進学から国内進学へと展望が変わったのは、帰国後に論文を読んだり、国内で研究室訪問をしたりしたことによる。アメリカの研究室に入っていたら考えは違ったかも知れないが、自分はやってみた方を好きになる傾向がある。

⑪ 留学中断という選択も、チャレンジだと感じた。計画通りにいかない状況で、自分の中での気持ちの整理と、進めなくてはいけない手続きがあった。精神面も行動面でも柔軟に対応する力がついたので1つの経験として良かったと思う。

⑫ 実際に留学へ行く・行かないに関わらず、計画は絶対にした方が良い。計画通りにならないかも知れないから留学を計画しないというのは良い選択肢ではないと思う。自分たちもCOVID-19流行という予期せぬ事態に留学先で直面し、何とか無事に帰って来て、新しいプランを立て直した。大変だったけれど、計画通りに行かないからこそ成長する、学びがある。果敢にチャレンジすること、行くための準備、現地での対応、全てに意味があると思う。

⑬ 出発前に受けた保険加入や危機管理のオリエンテーションで聞いた話を留学中に思い出すことがあり、オリエンテーションは大切だと思った。またピンチの時に海外留学室から各国(アメリカ以外の国)に留学していた学生の状況も全体に向け発信してもらえたことで状況をより理解でき、連絡を取り合うことができた。そして3月、留学中断帰国をして半年間ガラガラ過ごすビジョンを描いていた学生が多く居たタイミングで、「早く帰国したら4月から復学できます」と

メールをもらえたことが本当に良かった。ふんざりが付き「よし、帰って頑張るぞ」という気持ちになった。

#### 学生 F

② 将来の展望としては、留学での学びを生かして大学院進学か、旅行業界への就職を考えていた。

③ 当時の心境としては、情報を得ることが難しく、情報を得ても刻々と変化し、さらに現地と日本の情報にギャップが大きく、とても不安だった。協定大学の日本人留学生の中で帰国を決めたのが最後から2番目だった。情報共有できる日本人も最後にはおらず、どうしようと漠然とした不安があった。名古屋大学からの連絡が始めは、残っても良いし帰っても良いと選択できたので、自分はフランスに残りたいという想いが強く、最後まで居ようと決めていた。ヨーロッパで感染が拡大した後に、名古屋大学から強制帰国の連絡が来て、帰るしかないとなった。

④ 留学中断決定から帰国は1週間。飛行機の問題が最も大変で、購入していた往復券の復路に値する便がなく、新たに買い直した。家族はCOVID-19感染拡大地域からの帰国に抵抗があり、ウイルスに感染していた場合に両親の仕事や妹の学校生活に影響が出るからと家族間で揉めた。海外留学室教員が名古屋大学の施設での2週間滞在を手配してくれたが、成田から名古屋への移動手段がなかったため成田に滞在した。

⑤ 帰国後は就職活動、卒業論文の執筆が中心だった。就職活動はフランス滞在中から行っていた。4年時の留学、5年間で卒業予定だったので、ロンドンキャリアフォーラムで内定を得て、翌春に卒業、就職を当初予定していた。1～2月からロンドンキャリアフォーラムに向けて準備をしていて、最終面接まで進んでいた日本の企業があったが、COVID-19感染拡大により4月に打ち切りとなってしまい、振り出しに戻ってしまった。6月の東京の留学経験者向けキャリアフォーラム参加に向けて切り替えようと思った。

⑦ 満足度：70% 日々の生活、学業で毎日ベストを尽くそうとしており、成績が伸びつつある中での帰国だったので、結局どれだけ伸びたのか指標が分からないまま帰国になってしまった。今後の旅行業界に就職というキャリアに繋がる活動（フランスの世界遺産めぐり）ができなかった。キャリアフォーラムでの応募企業も人の移動に関わる業界だった。

⑨ キャリアへの影響：80% 旅行業界を志望してい

た自分にとってはフランスの観光地を巡ることが就職の準備だと考えていたが、その前に帰国となったため準備が出来なくなってしまった。旅行業界もコロナ禍で採用なし、見送りとなってしまった。

⑩ 就職は、全く異なる分野だが、自動車関連メーカーに内定した。業界を変えた経緯としては、焦りから自棄になって今まで興味のなかった業界にもエントリーし始めた。自動車業界は変化の著しい時代の真只中にあり、「変化」への免疫、乗り越える術を生かせるのは自動車業界だと感じた。自動車会社は、水素や電気で走る車の開発など、世界の流れや競合他社の動向など周囲環境の変化に対応をしながら目標に向かわなければならず、対応力、情報力、行動力が試されると思っている。留学や、COVID-19で帰国した経験を、「変化」への対応という部分で生かせるのではと感じ、自動車業界への就職を決めた。

⑪ 激しい変化の中で考えて行動する力、そのための情報を集める力、家族と揉めた経験からは、相手の立場を考えながら自分がこうしたいと交渉する能力が身についた。

⑬ 海外留学室の教員には感謝しているが、日々状況が変わる中でもっとコンタクトを取ることができたら良かったと思う。他大学では早い段階で強制帰国の命令が出ていたが名古屋大学は本人に任せてくれた。自分はロックダウンになるからと買い物など巣籠の準備をした翌日に、帰国するよう連絡があった。細目にやりとり出来ていたら、帰国の準備と覚悟もしやすかったのではと感じた。自分の様に4年時に留学し、就職活動も卒業論文も留学中に行うのは特殊なケースだと思う。3年秋に就職活動を始める段階で大学生活のやり残しを考えた際、留学にチャレンジして広い視野を持つことは卒業が遅れても無駄じゃないと思った。

#### 4. 考察：留学中断がキャリア設計に与えた影響

インタビュー記録をもとに学生個々の留学前後のキャリア設計を比較し、以下〔表2〕にまとめる。また大学卒業後の進路より先のキャリア設計を将来展望として併記する。

〔表2〕 留学前後のキャリア設計比較

学生	留学前の進路設計	実際の進路 (D・Eは予定)	卒業年度	将来展望
A	就職	進学 (国内他大学)	2020年度	就職 / 研究者
B	就職 (日系企業)	就職 (外資系企業)	2020年度	政治家
C	海外大学院進学	進学 (内部進学)	2020年度	再留学
D	国連職員 (難民支援)	就職 (第一希望: 広告代理店)	2021年度	-
E	海外大学院進学	進学 (国内他大学 / 内部)	2021年度	再留学
F	就職 (旅行業界)	就職 (自動車業界)	2020年度	-

### (1) キャリア設計が変更となった要因分析

学生 A は当初 7 月の帰国後から就職活動を予定していたが、留学中断が決まった 3 月から焦って就職活動を始めた。しかし気持ちの切り替えがうまくできず、8 月まで就職活動を続けたが就職をしたいと思える会社を見つけることが出来なかった。学生 B は早期帰国で就職活動の幅が広がり、企業選択の基準を見つめ直した。学生 C は学部在籍年数を 5 年間から 4 年間へと短縮することで、目標の海外大学院進学のタイミングを後ろ (内部進学後) に移すことが可能となった。学生 D のキャリア設計には変更があったが、その要因は留学中断による影響ではなく、留学中の活動経験と、夢見ていた仕事 (国連職員) への見極めに起因する。学生 E は留学後期にアメリカの大学院研究室を検討する予定が叶わず、帰国後に 1 年前倒しで本学研究室に所属、国内の大学院研究室訪問をしてキャリアプランを再構築した。学生 F は、本人が影響力 80% と高い数字を挙げるように、留学中断および COVID-19 の影響を大きく受けた学生である。学部 4 年生時に留学、留学中に就職活動という状況であったため、留学中断と同時に就職活動も中断となってしまっている。更に学生 F が就職を志望していた旅行業界は COVID-19 の影響を真っ向から受けており、学生 F がエントリーする業種を変えざるを得なかった背景も納得できる。

このようにキャリア設計が変更となった理由が留学中断帰国の直接的影響による者もいれば、全く別の理由により結果的に当初のキャリア設計が変更となった者もいた。

### (2) 留学中断がキャリア設計に与えた影響の考察

最も「留学中断が自身のキャリア設計に与えた影響が大きい」と考えていたのは学生 F (影響力 80% と認識) であった。そして学生 F は留学中断という好まし

くない事態からも学びを得て、キャリア設計を再構築していることがインタビューから明らかになった。学生 F は当初のキャリアプランを大きく変更せざるを得ない状況下で「激しい変化の中で考えて行動する力、そのための情報を集める力」を得た、その力を自動車業界に求められる「変化」への対応という部分で生かしたいと語っている。本学では 1～2 年生時に短期海外研修に参加し、3 年生の秋から交換留学する学生が多いため (岩城, 2012)、3 年秋に就職活動を始める段階になって大学生活でやり残したこととして留学を意識し始め、4 年生時に交換留学するという学生 F の留学パターンはあまり例がない。学生 F は、留学にしても、就職活動にしても、その時々で立ち止まって振りかえり、自分と向き合い、納得できるキャリア設計を再構築していることが分かる。

一方で、学生 A は、大学卒業後は就職することを予定していたが、就職活動が思い描いていたように進まず、大学院進学へとキャリア設計を変更した。「就職活動を甘く見ていた」と本人は語っており、留学中断がキャリア設計に与えた影響力は 20% と低い数値で認識しているものの、インタビューを客観的に考察すると留学中断による影響の大きさが伺える。COVID-19 が流行し始めた後から帰国が決まるまでの期間に、学生 A は日本での就職活動を意識し始めた。そして帰国を決めた時点で就職イベント参加予約を開始した。学生 A の就職活動時期は留学中断の影響で急遽、前倒しとなった。焦って知識のないまま就職活動に臨んでしまったこと、協定大学のオンライン授業履修と並行しての就職活動で切り替えが上手くできなかったこと、これらを就職活動が厳しかった理由だと本人が受け止めていることから、社会情勢による留学中断が学生 A のキャリア設計に影響を与えたと言えるだろう。

学生 B と学生 E は、留学中断による機会の損失を仕方ないことだと割り切り、前向きに捉え直し、新た

な機会を獲得している。学生Bは予定よりも早く帰国した分、就職活動における選択肢が広がり、企業選択の基準を見直したことで、より自分に合った企業を就職先に選ぶことが可能となった。学生Eは予定より1年早く研究室に所属できるよう自ら交渉し、国内大学の研究にも目を向ける機会を得たことで、より自分に合った進学先を決めることが可能となった。学生Bと学生Eの共通事項として、留学中断が決定する前の段階から帰国の可能性を視野に入れており、帰国と同時に気持ちを切り替えてキャリアプランを再設計している。また、質問⑩「留学中断という体験を通して成長したと感じられること」に対して、両者共に「チャレンジ」というワードを用いて語っており、留学中断を前向きに捉えて行動に移した様子が伺える。就職活動がうまく進まなかった学生Aが質問⑩に「特にな」と返答していることから、留学中断の捉え方が、帰国後の活動に影響を与えたという可能性も考えられるのではないだろうか。

社会情勢による留学中断がキャリア設計にプラス面でもマイナス面でも殆ど影響を与えていないと考察されるのが、学生Cと学生Dである。学生Dは学部1年時に交換留学制度に応募し、学部2年時に渡航している。大学卒業後の進路を考える一般的な時期より早い段階で留学をしているため、留学前後のキャリア設計を比較することは社会情勢による留学中断の影響を図る上であまり参考にならない調査結果となった。学生Cは海外大学院進学を目標としており、その時期を学部卒業後すぐから大学院進学後に調整することで留学中断の大きな影響は受けなかった。

また、学生Cと学生Eは、今回の留学中断で短縮された交換留学期間の補足ではなく、研究を深める目的での大学院生としての留学を目指し続けており、学生Bは最終的には政治の世界で働きたいという展望を持ち続けている。先々までのキャリアを検討し続けている学生は、留学中断後のキャリア設計再構築に柔軟さがみられる印象を受けた。学生Cが留学中断という体験からその柔軟さを身に付けたと認識していることも興味深い。

### (3) ケーススタディによる見解

これら学生6名のケーススタディから以下の見解を報告したい。まず、社会情勢による留学中断を学生自身がどう捉えるかということが、彼らのキャリア設計

再構築に影響を及ぼしたということである。学生Bと学生Eは留学中断を前向きに捉え、すぐ意識を切り替えたことで、新たな機会を自ら創出することができた。留学中断の影響が彼らのキャリア設計にプラスに働いたと言える。学生Aは留学と就職活動が切り替えられないまま活動開始し、自分を見つめ直すクールダウン等の機会もないまま就職活動を継続してしまったため、留学中断の影響が学生Aのキャリア設計にマイナスに働いたと言える。よって社会情勢のような本人の望まない理由で留学中断となった場合、その捉え方が重要だと考えられる。

そして、留学中断という体験からも、大学生は学びを得ているということが明らかになった。学生Fは「激しい変化の中で考えて行動する力や、情報を集める力を身につけ、その力が生かせる業界を就職先に選んだ」と自己認知しており、学生Cは「プランBの大切さを学んだ」と内省している。学生Eは質問⑫後輩への助言として「大変だったけれど、計画通りにいかないからこそ成長する、学びがある」と話してくれた。学生Dは「そもそも留学はプラン通りにはいかない。留学を目指して頑張る過程が重要だと思うようになった」と振り返っている。社会情勢による留学中断からも学びを得て、逞しく成長する大学生の姿を見ることができた。

## 5. 大学による支援と課題

留学の中断は、学生自身の意思によるケースと、社会情勢など外部要因によるケースに大きく分けられる。今回調査対象としたのは後者のケースで、名古屋大学はどのような対応を取ったのか、それが学生にどのような影響を与えたのかを、インタビュー記録を基に省察したい。

### (1) 各学部の研究室指導教官による支援

学生が帰国後のキャリア設計を再構築する場面で重要な役割を果たしていたのは、研究室の指導教員であることが分かった。学生AはCOVID-19流行前の1月から、研究室の指導教官に大学院進学について相談をしていた。8月まで就職活動を続けたが思うようには進まず、大学院を受験し合格を得て進路が決定した。学生Cは当初、留学中断という事態を受け入れられずにいたが、指導教官からの助言を得て、大学卒業時期を早め内部進学し、その後に再度留学を目指すキャリ



アプランを見出した。結果的にそのプランの方が良かったと学生C自身も納得している。学生Eは2020年5月に帰国し2021年4月から研究室に所属する予定であったが、指導教官と交渉し理解を得て、2020年3月に帰国し2020年4月から研究室に所属できることとなった。その結果、国内での研究に興味を抱き、国内大学院への進学を志望することとなった。これらの事例から、研究室の指導教員が学生個々の事情を受け止めサポートしたおかげで、彼らはキャリアプランを再構築できたという事が明らかになった。

## (2) 海外留学室（学生派遣を担う部門）の役割

学生が留学を中断し帰国する過程では、学生派遣業務を担う海外留学室の役割が大きいと分かった。役割の1つ目は、情報共有である。学生B「家族にも電話してもらってありがたいと感じた」、学生D「協定大学に帰国について先んじて連絡してもらえたため意思疎通がすぐできた」、学生E「他国に留学していた学生の状況も発信してもらえたことで、状況を理解でき連絡を取り合うことができた」というコメントから分かることは、学生たちへの情報発信、留学先大学への情報伝達、家族など周囲の人への情報説明など、大学が正確な情報を集約し共有することが、学生の必要とする支援であったということである。

海外留学室の担う役割の2つ目が、帰国判断への相談対応である。交換留学生には外務省の海外危険情報レベルを根拠とした本学の決定に基づき、帰国指示が出される。外務省は安全対策の目安をレベル1～4のカテゴリーに分けており、レベル1：十分注意してください、レベル2：不要不急の渡航は止めてください、レベル3：渡航中止勧告、レベル4：退避勧告、となっている（外務省HP）。学生Cの「レベル1段階でもっと強い言葉で帰国を勧めて欲しかった。今となってはレベル1の時に帰国すべきだったと分かるが、その時はレベル2になってからで大丈夫だと思っていた」という意見、学生Fの「他大学では早い段階で強制帰国の命令が出ていたが名古屋大学は本人に任せてくれていた。日々状況が変わる中でもっとコンタクトを取ることができたら良かった」という要望、学生Aの「帰国することを自分で決断することは何かから逃げているような気がして心苦しかった。」という想い、これらを貴重な意見として記憶しておきたい。また学生自身が留学を続けるか中止するかを判断することは心理的

に負荷が大きいという事が当調査で明らかになったため、これらの意見を社会情勢悪化時に留学中の学生や渡航予定の学生に提示して判断材料としてもらうことや、大学側が細やかに相談に応じることが必要であるだろう。

## (3) 経済的援助の必要性

留学生教育学会が実施した緊急アンケート調査（2020）結果では、留学を中断した学生は、帰国時の高額な航空機代と隔離期間のホテル宿泊代、留学先の住居費を払い続けるなどの金銭的な打撃が明らかとなり、緊急時には想定外の出費が発生し、そういった重圧がメンタルヘルスにも影響しがちである（中野・石倉・近藤、2020）と言及されている。日本学生支援機構 Japan Student Services Organization (JASSO) 奨学金給付を得て渡航した学生Cは「留学中断と同時にJASSO奨学金も打ち切りになると言われ直接訴えた」と言っており、学生Bは「海外渡航危険レベルが香港デモでは上がらなかったため補助金などがなかったことは不満である」と言っている。民間奨学金で渡航した学生Dは緊急帰国による出費についても援助を得ていた。学生には奨学金や資金援助が得られて当たり前という感覚を持たないよう説明し理解を得る必要がある。一方で、大学や奨学金支援組織には、社会情勢など個人の手が及ばない事由で緊急帰国となり想定外の出費が掛かるケースでは、経済的な援助というかたちでの学生支援が必要とされている。

## (4) 緊急帰国後の見通しを提案することの重要性

本稿「4. 考察：留学中断がキャリア設計に与えた影響」で、留学中断を前向きに捉え、すぐ意識を切り替えた学生は、新たな機会を自ら創出することができており、留学中断の捉え方がキャリア設計の再構築に影響を与える旨を述べた。ケーススタディからは、学生が意識を切り替えるという点において、学生個々の帰国後の見通しを海外留学室から提案したことが手助けになっていたことが明らかになった。学生Bは海外留学室に「就職活動への悪影響が及ばないよう内定先から問合せがあった際に事情説明をしてもらえよう協力を依頼」「帰国後すぐにゼミと授業履修を特別に許可してもらうよう交渉をお願いした」と言っており、学生Eは「留学中断帰国をして半年間グダグダ過ごすビジョンを描いていた学生が多く居たタイミングで、

早く帰国したら4月から復学できるとメールをもらえたことが良かった。ふんぎりが付き頑張るぞという気持ちになった」と言っている。緊急事態下で不安を抱える学生たちに大学が先の見通しを示したことは、安心感を与え前に進めるよう背中を押すことに繋がったと考えられる。

社会情勢によって留学中断を余儀なくされた学生が、納得できるキャリア設計を再構築するためには、留学を支援する海外留学室、教育研究の基盤である各部署、奨学金制度など経済面での学生援助を扱う事務部門、これら大学内の機関で連携を図り、学生自身が帰国後の大学生活の見通しを立てられるように支援していくことが重要であると提言したい。これら今回の調査とケーススタディで得られた省察結果をふまえ、今後の留学支援業務に邁進していきたい。

## 参考文献

- 岩城奈巳, 巽洋子 (2021) 「COVID-19による学生の留学に対する意識変化—大学生への調査を通して—」『名古屋高等教育研究』第21号, pp 188-216
- 岩城奈巳 (2012) 「留学推進の取り組みが交換留学に与える影響についての実態調査」『名古屋大学留学生センター紀要』第10号, pp23-29
- 中野遼子, 石倉佑希子, 近藤佐知彦 (2020) 「COVID-19による日本人学生の派遣留学への影響—日本人学生の声を中心に—」独立行政法人日本学生支援機構ウェブマガジン『留学交流』, vol.112
- 野水勉 (2004) 「重症急性呼吸器症候群 (SARS) への名古屋大学の対応について」『名古屋大学留学生センター紀要』第2号, pp 39-43
- 外務省 HP (<https://www.anzen.mofa.go.jp/masters/risk.html>, 2021.03.31)
- 留学生教育学会 (2020) 「緊急協力依頼」新型コロナ流行と留学事業について緊急アンケート調査 (<https://jaise.org/archives/508>, 2021.03.31)